



- ①進んで学ぶ生徒
- ②心豊かな思いやりのある生徒
- ③たくましい生徒

落語『初天神』

校長 岡田 英行

令和4年元旦。今年も、吹上中の校舎屋上から初日の出を拝みました。本校着任以来、欠かさず続けてきた個人的な恒例行事です。白々と辺り一面が明るくなると、遠く南の空には暗闇から富士山が姿を現します。オレンジ色に染まる山肌は感動的です。やがて、東から昇る朝日の勢いに、「今年も、心新たに吹上中で頑張ろう！」という気力が湧いてきます。

年頭に当たり、保護者・地域の皆様のご健康とご多幸をお祈りしますとともに、本年も吹上中への一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

新年は、ご家族おそろいで過ごされたご家庭も多いのではないのでしょうか。そこで、親子の正月模様を面白おかしく描いた落語『初天神』を紹介します。初天神とは、天満宮で年の初めに行われるお祭りで、クレヨンしんちゃんのように口達者な子供と、その子供に振り回されながらもお調子者ぶりを発揮する父親との滑稽話です。他愛のないやりとりの中に、ほのぼのとした親子関係が味わえて幸せな気分になれます。そんな、何気ない幸せを感じられる平穏な年になるよう願っています。



大工の熊五郎が一人で初天神に出かけようとするが、女房に息子の金坊を連れていけと言われてしまう。金坊のお目当ては、縁日に並ぶ屋台で好きなものを買ってもらうことなのは百も承知。今日は何も買わない約束をさせて渋々連れていく。しかし、おねだりをしないでいい子にしているのを認めさせて、そのご褒美にまんまと飴玉を買わされてしまう。熊五郎は熊五郎で、ちゃっかりと売り物の飴を次々になめ回して味見をしており、店の主人も呆れ顔。

飴を食べ終えた金坊は、今度は凧を買ってくれと騒ぎ始める。大勢の人が見ている前で泣きわめくものだから、熊五郎はたまらない。とうとう折れて一番小さい凧を買おうとするが、凧屋の主人にもうまく丸め込まれて大きい凧を買わされてしまう。

熊五郎：「なんて日だ。金坊なんて連れてくるんじゃないかった。」

後悔する熊五郎の隣で、凧を持ってはしゃぎまわる金坊。やがて、手本を見せてやると空き地で凧を上げ始める熊五郎だったが、金坊よりも凧上げに熱中し出す始末。なかなか代わってくれずにじれる金坊は、無邪気な父の姿を見て涙声になりながら訴えてオチになる。

金坊：「こんなことなら、おとつあんなんで連れてくるんじゃないかったよ。」

おかげさまで開校75周年 ⑧

吹上中開校の年の3学期は、昭和23（1948）年1月12日（月）に始まりました。始業式時点での生徒数は346人で、1年生のみ男女混合、2・3年生は男女別のクラスでした。まだ戦後復興の途上にあった社会状況の中で発行された生徒会機関誌「校友」第1号には、当時の中学生が書いた新年の抱負が掲載されています。『新春を迎えて』と題する、1年男子生徒の作文です。この年は暖冬で、初雪を見たものの降るそばから解けてしまい残念であること、それでも白く輝く秩父の山々や富士山の姿を心に映して1年を過ごしたいという覚悟が綴られています。そして、作文の最後は次のように力強く結ばれています。

いかにして今年を過ごせばよいか。これは社会科にて論文を書かされたが、「よく学びよく遊べ」を頭において過ごせば去年より以上の効果が上がるかもしれないと思うと喜ばしい。

今年こそ建設復興の年である。私達はこれをよく理解して行かなければならない。

新春を迎えて、以上私の感想である。

年が改まり、「今年こそ」と思うのは昔も今も変わりません。3学期の始業式に続いて行っている立志式も11回目となり、今年も2年生代表の頼もしい決意表明を聞くことができました。良い年になりそうです。